



Title	中国歴史城郭格式の一考察 : 南北朝都城を中心に
Author(s)	曹, 陽
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1988, 22, p. 21-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56501
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国歴史城郭格式の一考察

南北朝都城を中心に

曹 陽

中国の城郭制度の発生発展に関する研究は近来考古学分野の新発見により、著しい成果を上げている。しかし、考古学上の発見だけでは一概に解決できない問題は沢山あり、加えて考古学上の発見により新たな問題も出され、これらの問題を検討するには、歴史資料の取り扱い方や歴史地理学による総合研究に依存する面が必然的に多くなるのであろう。そういう意味で本稿では、中国歴史城郭制度とその格式をめぐる南北朝都城を中心に、新しい角度から漢から隋唐までの各朝都城の系列関係も含め、見なおしていこうと思う。

1 『周礼』と城郭制度

『周礼』とは周代の官制礼法を記した書で、周公旦の作と普通言われている。「天官」、「地官」、「春官」、「夏官」、「秋官」と「冬官」の六つの部分によって構成されているが、ここで問題とするのは「冬官考工記」である。『考工記』本文は「匠人营国。方九里。旁三门。国中九经九纬。经涂九轨。左祖右社。面朝后市。市朝一夫。」とある。注釈はいろいろあるが、あらまし次のような意味の内容とされる。「王の都城は九里四方で、各一辺に三つの門を設け、城内には東西方向と南北方向との幹線道がそれぞれ九本あって、それぞれの道幅は九つの車が並んで通れる。（中央に王宮があって、王宮の）東に宗廟、西に社稷、前方（南）に政府、後方（北）に

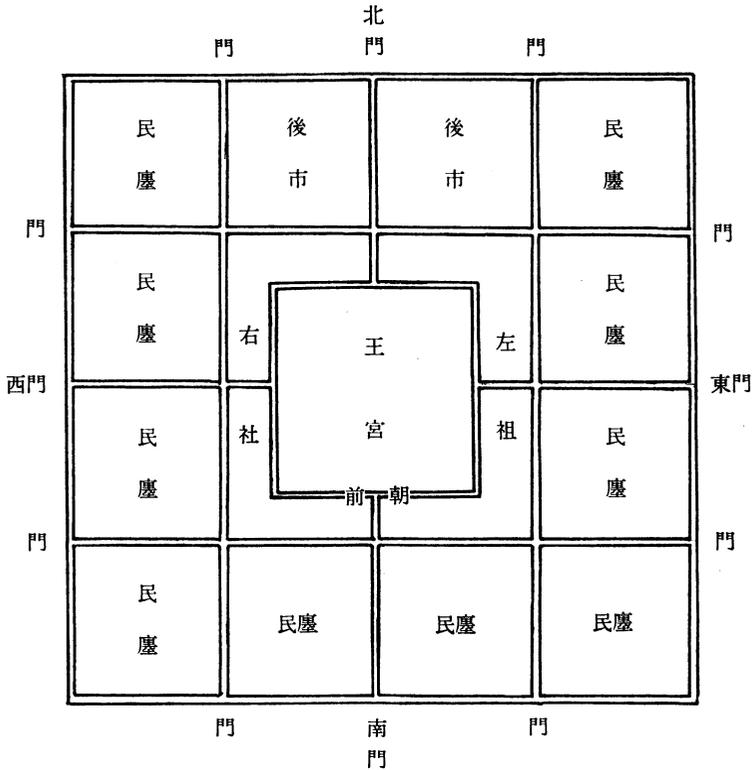


図1 周礼考工記図（曹陽作図）

市場や娯楽場を設けて商人や旅客の集まる場所とする。』¹⁾ この『考工記』の考え方は、周代に行われたという井田の地割（井田制）に基づいた発想だと考えられている。さらにそれを図で表すと、図1の通りである。

中国の城郭研究において、中国の歴史城郭はいずれもなんらかの形で『周礼』「考工記」に則るものだという通説が従来から受け継がれているが、それに対して、『周礼』をもって基準に作られた城郭はこれまで確認された遺構プランから見ているかぎり、皆無に等しいと異説を唱える学者

もいる。たとえば、村田治郎氏が王宮を都城の中央に置くという点において、元の大都が唯一の実例で、宗廟、社稷、前朝というような付属的なものは早くから存在した慣例に基づくのであり、「考工記」のみに見られる特色ではない。『周礼』は一種の理想像であり、都城建設の慣習ではない。むしろ、「宮闕の一部が外城内にありさえすれば、どこにあってもすべて「考工記」の範疇だ」としている。²⁾ いずれにしても中国の歴史都城と『周礼』『考工記』そのものについて、いくつかの重大な問題が未だに解明されていないのである。それをどう見るかによって、中国歴史城郭の制度体系に対する理解が大きく変わってくると思うが、それに関しては、誌面の関係で別稿に譲ることにしよう。

次の節に入る前に、つい最近に出版された楊寛氏の『中国都城の起源と発展』について一言紹介しておきたい。この本の主旨は、周初に成周の城郭が洛陽に營造されて以来、中国の古代都城の基本的構造は、①君主の宮殿及びその統治機関としての官署部分が所在する小城部分（＝城）と、軍士・庶民・被征服民などが居住し、製鋼・製鉄などの工房が分布する大城部分（＝郭）とより構成され、②前漢長安城以前は小城が西南隅に東面して設置されることが多かったが、後漢洛陽城以降は小城が中央部に位置して南面するようになり、③その変化には西南隅を尊位として東面する家を中心とする礼制から、北部を尊位として南面する君臣関係の礼制への移行が反映しているのであり、④北魏洛陽城および唐長安城の構造もその延長にあるものと考えられる、というものである。³⁾

いわゆる“小城大郭”説は別に新説とは言えないが、思うに“城”と“郭”の定義自体は矛盾する場合が多い。例えば後漢洛陽城では、いわば“中央に位置する小城”は宮殿であり、官署はむしろ“大郭”の中にあるのである。実際官署と宮殿が一緒になることは皆無である。そして洛陽城の場合、“大郭”と称するよりも“小郭、と呼ぶほうが分りやすいと思わ

れる。

ところで、楊説に見られる新しい着想というのは、中国歴史都城系統は後漢洛陽城を境に、“坐西朝東”から“坐北朝南”への築城様式の転換ということである。確かに前漢長安城を例にとってみれば、宮殿の重心を西南に置き、西南の城壁を最初に造営した点で、北部に宮殿を置き、北壁をまず造築した唐長安城⁴⁾とは明白な対照となる。もしこのような事実を理由に、“坐西朝東”と“坐北朝南”という都城造営の転換関係を説明すれば面白いのではないかと思う。それはともかく、楊説によると、後漢洛陽城を起点に、それ以後の中国歴代城郭は“小城”が中央に位置し、南面するようになったのである。

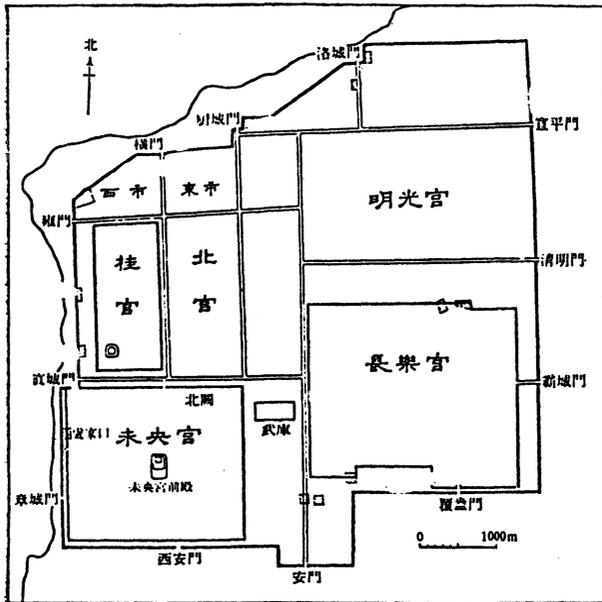


図2 漢長安復原図（王仲殊『漢代考古概説』）

2 歴史城郭プランの系図

次に漢より隋唐までの都城形態プランを比較して、その系図構造を考えてみよう。まず漢の長安城図(図2)について見てみよう。城の形態は不規則な正方形を成している。それは西北の城壁が川岸に隣接して造られたので、西北の角が欠けたためとも考えられる。それに対し後漢洛陽城は南北九里余り、東西六里余りという長方形を成し、よって「九六城」と古来称されていた。南宮と北宮があったが、北宮は太後の寝殿であり、主要宮殿は中央寄りの南宮であった(図3)。

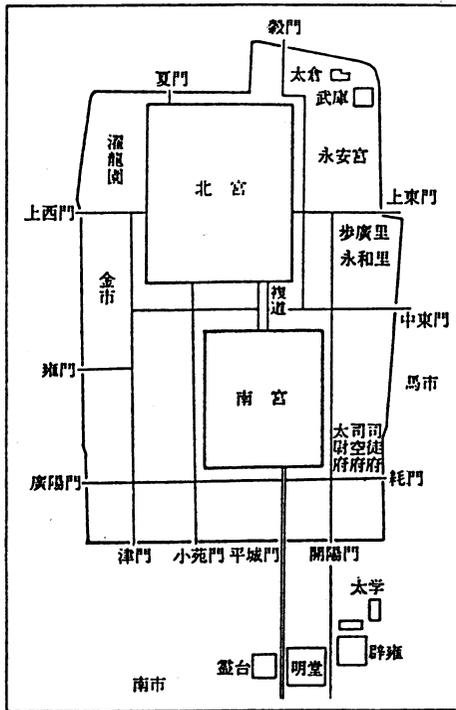


図3 後漢洛陽復原図(尾形勇『東アジアの世界帝国』)

“斗城”という異名をもつ漢長安城は、名前からどうも人に不規則な印象を与える。それに対し、“九六城”の別名を有する漢洛陽城は人に規則的な矩形のイメージを連想させる。それぞれの都城プランを見れば、実に適確な比定だと感心するであろう。要するに、漢長安城に比べ、後漢洛陽城はより厳密な都城計画に基づいた築城が行なわれたものであり、それまでにはなかった完全な企画築城であると言うことができよう。

後漢が終って曹魏になる時、洛陽城は董卓によって焼かれたので、最初は一時期鄴城を首都とした（図4）。鄴城もまず計画に基づいて設計され、宮城と戚里とを城の北と南にはっきり区別した点において、中国歴史都城史の中では画期的な位置を占めている。つづく魏晉の洛陽城は後漢の洛陽を改造し、同じように南北宮を築いたとされているが、最初は北宮を主宮とし、後は南宮を主宮とした。また防御の面において一段と強められ、城の西北角で高い金鏑城が築かれた。位置にしろ形にしろ、鄴城の三台そのままを範としたと見られる（図5）。

西晋王朝が滅亡するとともに、洛陽城は幾度も戦火を浴び、廃墟となっ

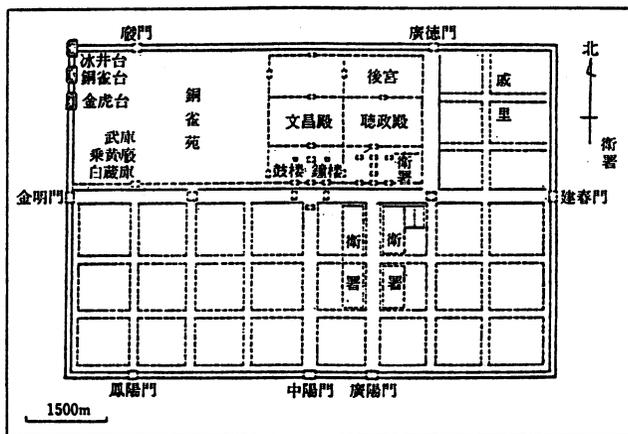


図4 曹魏鄴城図（尾形勇『東アジアの世界帝国』）

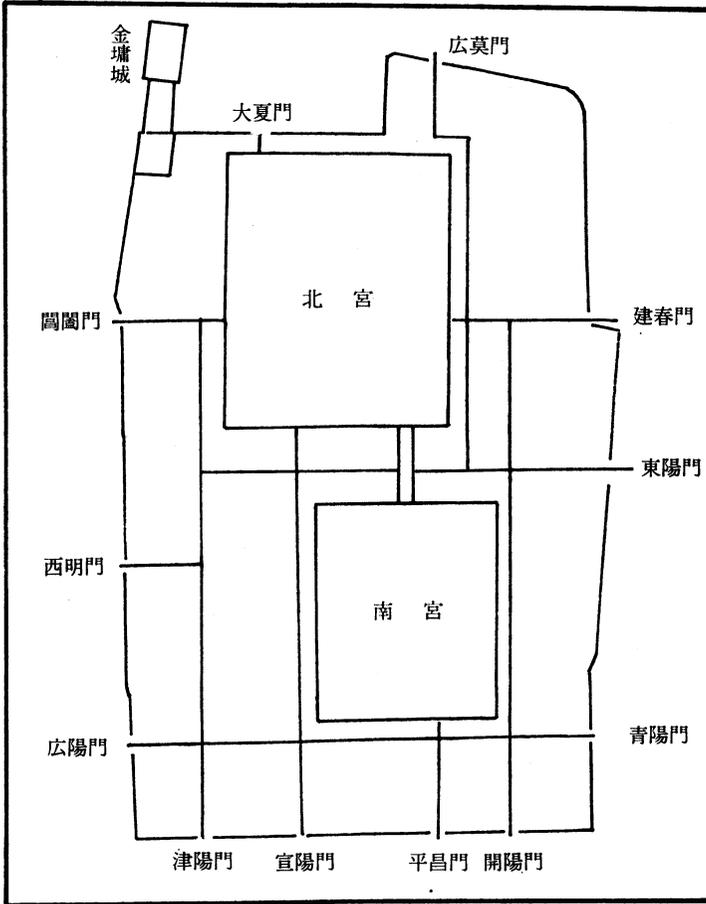


図5 魏晉洛陽想定図（尾形勇の『東アジアの世界帝国』と考古1973—4の原図をもとに作成したもの）

た。北魏の第七代皇帝孝文帝が平城から洛陽に移ってくるまでおよそ200年の歳月がたった。その北魏洛陽城は5年かかってやっとできあがった。図6はその形態プランである。こうして新しく出来た北魏洛陽城は、中国歴史都城の中で極めて重要な位置を示すに至った。この北魏洛陽城の特徴について後ほどまた詳しく分析するが、先に隋唐の都城を見てみよ

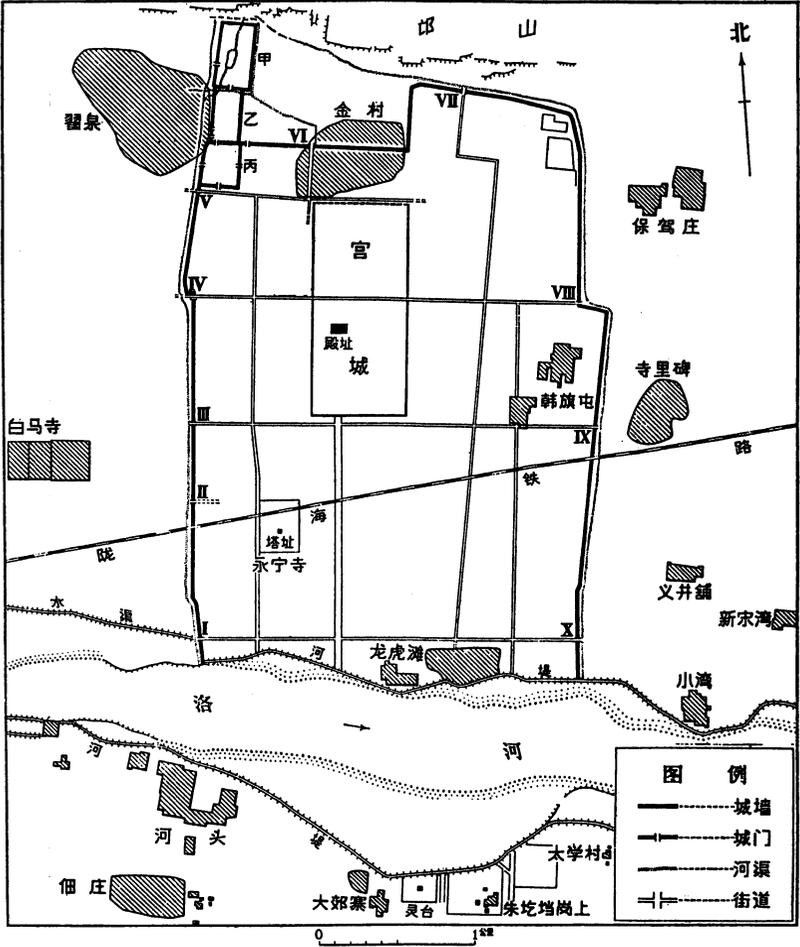


図6 北魏洛陽城實測圖(考古1973—4)

ら。

今に知られている唐長安城は隋の大興城をほとんどそのまま受け継いだもので、大興城より長安城のほうがずっと長い時間に渡って存続していたので、大興城より名が知られている。唐長安城は漢長安城とまったく別の

“三朝制度”を初めとした礼法制度を取り入れながら、「考工記」に合わせた形での唐長安城はまさに中国歴史都城の中で最も整備された都城と言えよう。

唐の東都洛陽は、漢、魏、晋、北魏四朝の洛陽城址の西18里に位置し、やはり隋によって築かれた城郭で、東京と称された。唐になって洛陽宮や東都と改められた。西京長安と合わせ、“東西西宮”と呼ばれた。西京長

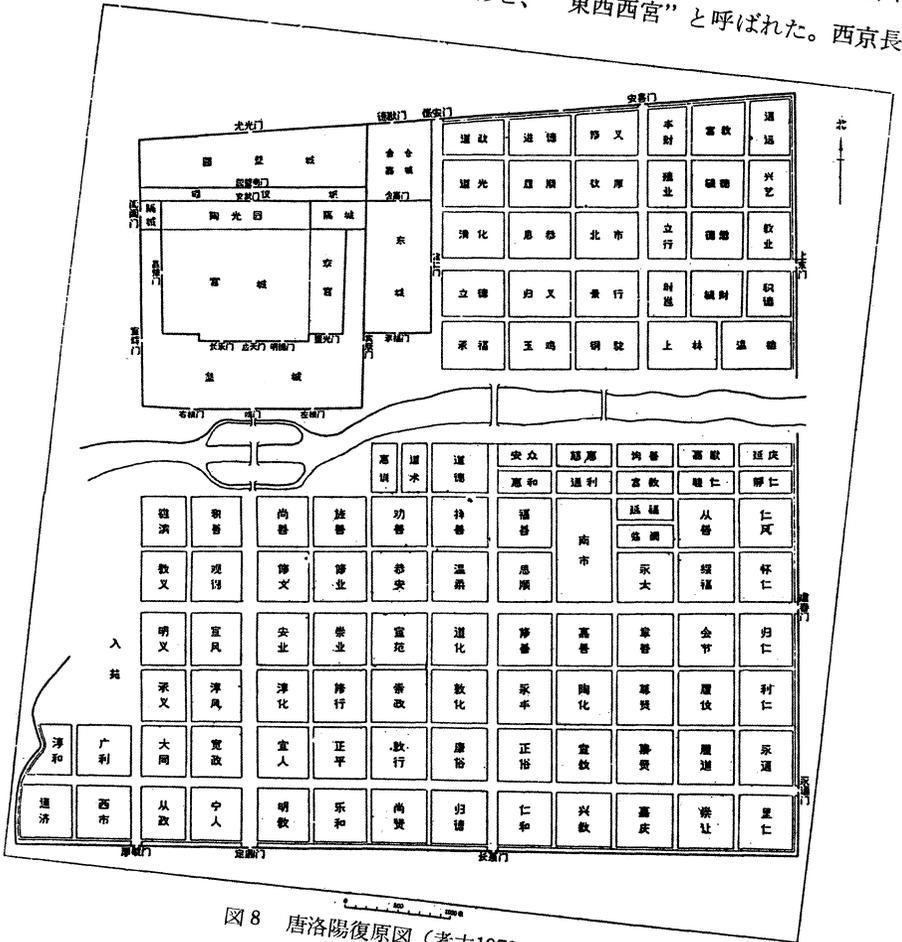


図8 唐洛陽復原図(考古1978-6)

安と異って洛陽城の宮城を西北角に置いた点は、防御上からの、魏洛陽金鋪城の延長か、または長安をバックにする副都としての性格からであろう(図8)。

このように、中国の歴史都城の形態は、曹魏の鄴城あたりから除々に「考工記」に記されているように、宮城が民廛の中にあるより、離れて城郭の北に置くという一つの新しい特徴が認められる。そしてこの形式は南北朝時代になってほぼ決まった形になり、さらに隋唐の都城につながっていくものと筆者は考えている。

こうしてごく簡単に漢から隋唐までの城郭格式を探ってきたが、南北朝時代の都城はこれまで数えてわずか41年しか続いていなかった北朝の北魏洛陽城をもって代表されているのに対し、300年以上もほとんど中断なく続いた六朝建康城についてはほとんど重要視されていない。そこでいったい建康城は中国歴史都城の中にどのような位置を占めるべきかを検討してみようと思う。

3 建康城を中心に

江南六朝の都城たる建康城については、従来学界における“重北軽南”の傾向に支配されているため、現代に至って、研究成果は極めて少ないと言わねばならない。むろん建康城址は隋によってことごとく耕田化、荒田化されたものも大きな要因であろう。そのため現在まで残されている建康城の遺跡はほとんどなく、中国歴代都城の中でも南朝建康城の実体は最も判りにくいものとされている。特に現代の南京城はかつての建康城址の真上にあるので、考古学的調査はあまり期待されない。従って建康城研究を行う際、考古学的発見よりも歴史文献、地図または地表観察など歴史地理学的研究法が、より重要であろう。図9は文献などによって考案された朱俣氏の研究成果で、1930年代より学界において基準とされ現代に至って

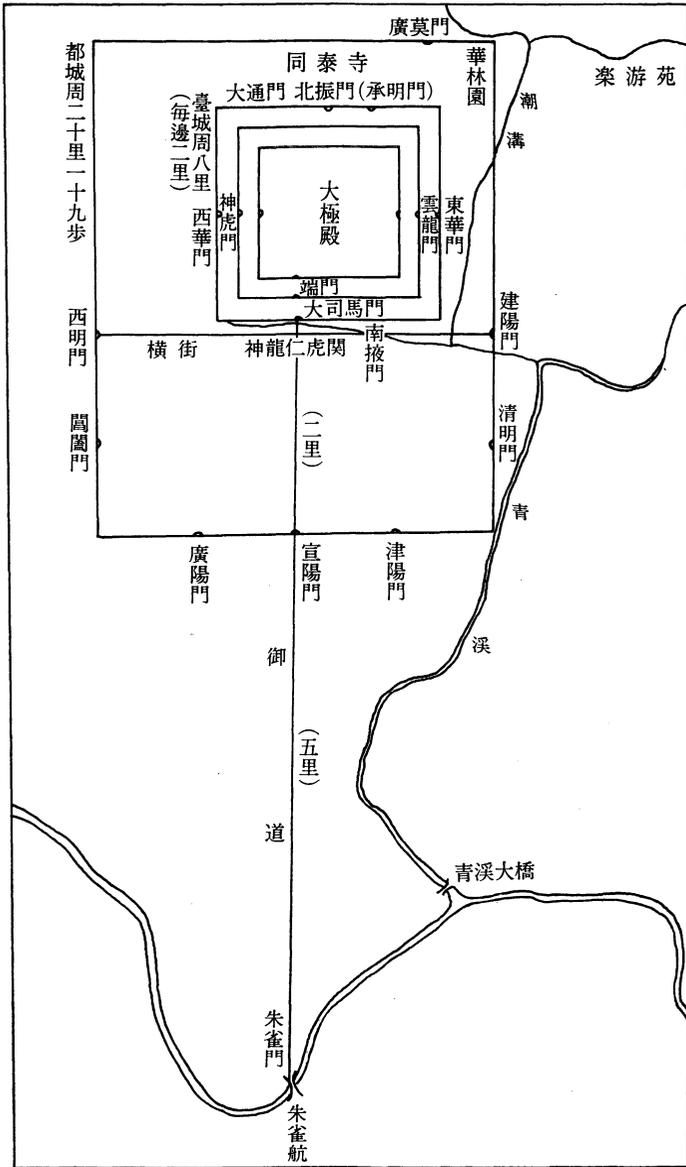


图9 梁都建康图 (朱俊『金陵古蹟図考』)

る。朱偁氏は「東晋の外城は呉の旧址に基づき周20里19歩」とか、「太初宮のあった場所は東晋の建康宮の西南であった」などの古文献を利用し、建康城図を想定したのであろう。⁶⁾ 外郭は毎辺約5里とあるが、宮城も城郭も共に方形に近いものと仮定すれば、呉の建鄴・東晋・南朝の建康は「考工記」の系譜と見なされる。それは恐らく朱偁氏の説が、「考工記」の形式に強く依存したためであろうと村田治郎氏が指摘している⁷⁾。

さて、六朝の建康城と四朝洛陽城とはちょうどほぼ同じ時期に存在していたので、相互に影響を与えたであろうことは常識的にも十分考えられるが、なぜか従来それに関してほとんど研究されていないようである。先ほども述べたように、学界の“重北軽南”の為、長安城や洛陽城の研究は盛んに行なわれているのに対し、建康城の研究は進んでいない。筆者は建康城の実体を研究するには、洛陽城との影響関係に対する研究は非常に重要であると認識している。そこでまず、漢、魏、晋、北魏四朝の洛陽城門、宮門と建康城の城門、宮門との名称同士や格式が極めて近い関係にあるのに気づき、比較してみようと考えた。次に掲げるのは、漢、魏晋の洛陽城、東晋、南朝の建康城及び北魏の洛陽城の城門名称の一覧表である。

《漢》	《魏晋》	《東晋南朝》	《北魏洛陽》
-----	------	--------	--------

(東西北より)

上東門	建春門	建陽門 (建春門)	建春門
中東門	東陽門		東陽門
望京門	青陽門	清明門	青陽門

(南面東より)

開陽門	開陽門	開陽門 (津陽門)	開陽門
平 門 (正門)	平昌門		
苑 門	宣陽門 (正門)	宣陽門 (正門)	宣陽門 (正門)
津 門	津陽門	廣陽門 (尚方門)	津陽門

(西面南より)

廣陽門	廣陽門		西明門
雍門	西明門	西明門	西陽門
上西門	閭闔門	閭闔門	閭闔門
			承明門

(北面西より)

夏門	大夏門	玄武門	大夏門
穀門	廣莫門	廣莫門	廣莫門

その他、宮門にも同様または類似な門名が付けられている。中でも四神に因んで付けられるのが多い。しかし史料のくい違いや誤解が重なるため、またひき続き調べるつもりだが、上の表からは少なくとも洛陽城と建康城との関係は中国歴史都城史上稀に見る極めて近い関係であることは言えるであろう。ところで、城門の名称比較だけから見ると、北魏洛陽城と魏晉洛陽城とを直接結びつけても不自然ではないが、それを否定する見方を持つ筆者の理由として次の3点を主に述べたい。

1 まず、晋末(西晋)の洛陽城は実際、長期廢墟になっていた事実をあげたい。“八王の乱”から“永嘉の乱”、つまり異民族の蜂起へと華北の大混乱は果てしなく続いた。洛陽あたりでは戦禍は至る所に広がっていたため、いわゆる十室九空の史上有名な江南への中原人口の大移動を招いた。紀元311年、劉曜らが洛陽を陥れ、懷帝を捕えて平陽に移った。ここで西晋王朝は事実上滅び、洛陽は廢城となった。そして次の北魏洛陽城が復興するまでなんと200年近くもブランクがあり、その間洛陽は幾度も蹂躪されていたことは史書に明記されているとおりである。紙上では20年という実感はないだろうが、中原大混乱のさなかにおいて実に長い歳月であったろう。従って北魏は廢墟の上に魏晉の洛陽を再現できなかつたのであろう。

2 現代の考古学者が発見した遺構から北魏洛陽城の城内配置を見る限り、魏晉の洛陽城に比べ、かなりの変化が明白に見とめられる。とりわけ都城構成における二つの基本的要素——宮城と市の位置についてである。まず注目するところは、内城の北端に宮城が位置するようになり、魏晉までの中央に位置する南宮を主要宮殿とする習慣を廃止したことである。そして市の位置に関しては、「漢の粟市と晉の三つの市の中での二つの主な市——金市と牛馬市は全部洛陽城の地部に偏り、基本的に“面朝後市”という伝統に適合しているが、地魏洛陽城の市は漢、魏晉の市に比べ、明らかに南に移転していることが分る。⁸⁾

こうした新しい変化を見せた洛陽城は従来の研究上非常に重視されている。特に北魏洛陽城のこうした特徴は隋・唐の都城を通じ、さらに後代の中国城郭にも大きな影響を及ぼしたという観がある。都城を新しく造営するには建物だけでなく、それに伴う礼法制度もある。この二つを合わせたものこそ、名実ともに帝都と言える。しかし一体どうしてこの北魏洛陽城がこれほど素早く漢文化の核心である都城制度を受容し、かつ合理的に革新したのであろうか。周知のとおり、北魏は漢民族ではなく、匈奴系の拓跋族の王朝である。しかし、孝文帝の時から漢文化摂取に非常に熱心で、自ら胡服、胡語を廃し、民族同化を求めたとされている。そもそも遊牧民族なので、城郭と言うほどのものはなかったのであろう。

3 南北朝の史書『南齊書』『魏虜伝』の中に、次のような大変興味深い一節が記載されている。「(齊建元八年六月、北魏) 議遷都洛京、……九年、遣使李道固(李虎)、蔣少游報使(南齊)。少游有機巧、密令觀京師(建康)、宮殿格式。……虜(北魏) 宮室制度、皆從其出」とある。つまり、487年(齊建元八年)「(魏孝文帝) 議遷都洛京。」そしてその翌年すぐ土木建築を司る大匠蔣少游を密令し、副使として京師(建康)宮殿の格式を觀せしむということである。ところが、蔣のスパイ意図が舅の崔氏に見

破られ、彼を留めようとしたが、北魏との外交悪化を恐れたためか、斉世祖の同意が得られなかった。そこで斉の宮室制度が全部虜（北魏）に模倣されたと、梁の蕭子顯が指摘した。⁹⁾

従来、蔣少游の南朝出使について、『魏書』に従い、それを洛陽に遷都される前の北魏の根拠地、平城において始めて太廟、太極殿を営む時、蔣を派遣して魏晋の都城基址を量る一節と混同し、平城と結びつけようとしているが¹⁰⁾、それは間違いであると筆者は考えている。

中国の正史と言われる歴代の史書の中で、北魏王朝の記録『魏書』は漢人が書いた初めての異民族王朝史だったので、最初から大変困難な事情があった。王朝初代の道武帝の時登淵が国記を書き、三代目の太武帝の時代は崔浩が国記を編纂した。崔浩は拓跋族の北魏王朝を忌憚なく記述し、その一部を石に刻んで道に公示するような意地を張った。その罪で崔浩とその一族、著述に従った者など128人が殺される有名な国史事件が起った。最後に北朝擁護の漢人魏収が従来諸家の記録を集めて『魏書』を編纂したと言われるが、これが当時から穢史と呼ばれて評判の悪いことでは、中国史書の中の第一のものなのである¹¹⁾。

一方、北魏平城については、考古学の発見が少なく、なんとも言えないが、少なくともかなり未熟なもので、遊牧民の伝統や生活習慣が非常に色濃く残っていたことは確かのようにである。「城に堀がなく、建物に（馬を通させるためか）門が設けられていない。宮内の使は酒を作り、豚羊を飼い、牛馬を牧し、菜を植えて利を逐す……宮城は城廓の西に在る。」などと『南齊書』に記載されている¹²⁾。『魏書』にあるように魏晋の都城をまねた立派な平城とはほど遠いである。『南齊書』は南齊のすぐ後の梁によって編集されたもので、当時南朝の文風から見ても、北魏の史書などよりずっと信憑性の高い史書と言える。ゆえに、蔣少游の南朝出使とその前年の“議遷都洛京”とを結びつけ、北魏洛陽城は南朝京師建康城を範とし

たと考えても間違いではなかろう。また、487年に“議遷都洛京”とあるが、完全に遷都できたのは13年後の501年である。あまりにも時間がかかりすぎだが、その原因はつぎのような事情があったからである。魏孝文帝が洛陽遷都を決意しながら、朝中文武の反対ですぐには実行できなかったと言われるのも確かだが、なによりも建康城の制度を理解する段階が必要である。計画してから約5年たってからの493年、ついに全朝文武の反対を押しきって洛陽遷都を決行した。本来の遊牧民の性格と一世紀もの根拠地平城になれていたせい、太子詢でさえ孝武帝の漢化政策や遷都に反対したため、処刑されたほどで、遷都は幾度も難行した。最後に30万大軍を起し、南征するという名目で洛陽で止まり、そのまま遷都を宣言したという異例な非常措置を取り、やっとの思いで遷都が出来、ただちに宮都の造営が始められた。2年後に宮室がほぼ出来上がり、百官とその家族に新都への移住を命じた。しばらくして501年、再び洛陽大修築を行った。こうしてやっと北魏洛陽城が規模を整えたが、もちろん蔣少游によって計画し造営を行ったものである。『魏書』「蔣少游伝」によると、蔣某はもともと南朝人で、北族に捕えられてからその才能が認められ、大匠の官職が与えられたとある。¹³⁾ 蔣は洛陽城の計画造営者として、帰るに帰れぬ懐しい南朝の都を北朝のために再現したのであろう。南朝の複雑な宮殿格式や宮室制度を取り入れるため、計画してから出来上がるまで13年の歳月を要した。

要するに、以上述べてきたことから、南朝建康城が北魏洛陽城にこれまで見落とされた極めて重大な影響を与えたと考えるに至ったのである。そこで、建康城と洛陽城との影響関係をよりはっきりさせる為、以下に示す図式表をもって表そうと考えている。

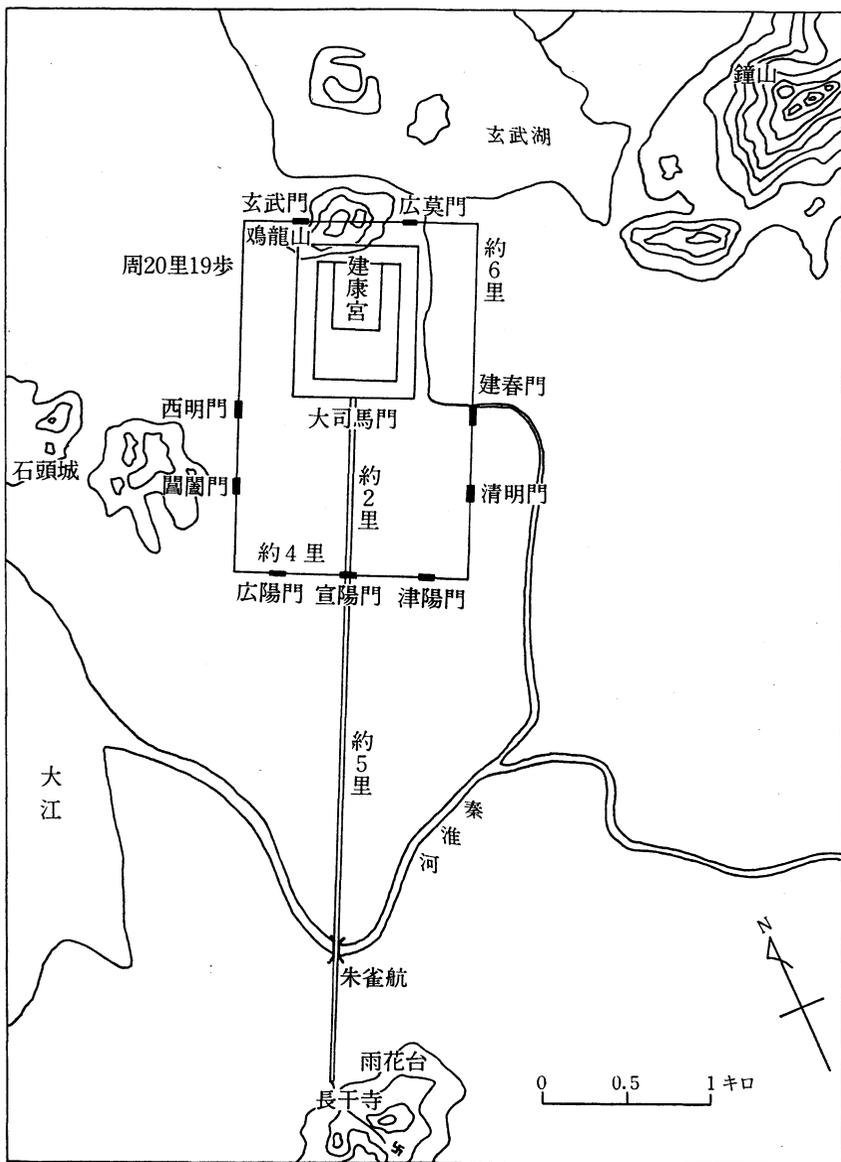


图10 建康城想定图 曹陽作图

	越会稽	後漢洛陽	A D 25~189
呉 建 業	A D 212~280	曹 魏 業	A D 205~220
東晋建康	A D 317~420	← 魏 晋 洛 陽	A D 220~311
宋 建 康	A D 420~479	北魏平城	
齊 建 康	A D 479~502	→ 北魏洛陽	A D 493~534
梁 建 康	A D 502~557		
陳 建 康	A D 557~589		

最後に、前に呈示した朱僕氏の建康復原図（図9）を参考にしながら、今まで述べてきた洛陽城と建康城との相互関係を考慮し、建康城の城郭形式は朱図のような正方形に近い形状より、むしろ“九六城”洛陽と似た比例を持つ長方形を呈したはずだと想定し、私案図（図10）を構想した。具体的に朱図と異するところについては、近代戦争に破壊される以前の南京城図（1928年）をもとに、昔ながらの主軸線を検出することによって、建康城の方位は真南ではなく、南やや西向きであると考えた。そうすると中央軸線ははっきりと南北両端に位する高地（雨花台と鶏鳴山）を結びつけるかのように意識的に仕向けられていることが分る。この点についてはそれなりの意味を有すると考えているが、それに関してはいづれ別稿で詳しく検討したい。さて私案図作成にあたって強調したいのは、図面上のノウハウだけでなく、建康城に新しい意味をつけることである。千田稔氏の言葉を借りると、つまり「景観の復原のみをもって歴史地理学が完結するとすれば、それでは技術論的な次元に踏み留まり、豊かな歴史の文脈に位置づける意図は見失われることになろう。また、歴史地理学における方法論について、景観の復原＝地理化は *metalanguage* であり、さらにそれが解釈され、意味論的場に進むとき、記号論的には *connotation* と呼ばれる *metric* 段階に達し、その時こそ、歴史地理学は新しい地平を展望するこ

とが可能となる。」¹⁴⁾ 建康城図の復元はその意味で、単なる地図化による **metalanguage** だけで終ることなく、一歩進んで中国都城の歴史の中における建康城のあるべき位置を探りたいと考えている。要するに、魏晋の洛陽城の影響を受けた南朝建康城は北魏洛陽城のモデルとされたことを実証し、さらに北魏洛陽城との位置転換により、これまで認識された北魏洛陽城から隋唐長安洛陽城への影響関係を是正し、南朝建康城の持つべき歴史地理的位置を見なおしたつもりである。

結 語

本稿の目的は主に南朝建康城に新たな歴史位置を定めることであるが、この部分は本来、日本の宮都制源流について平城京・平安京・唐長安洛陽直接模倣論という通論のほか、唐長安洛陽に大きな影響を与えたとされる北魏洛陽城は同じく南北が長く、東西に短い日本の平城平安兩京のモデルとする村田治郎氏や岸俊男氏の説に疑問を抱き、建康城研究を新たな視点に据え、それを中心に中国都城制から日本宮都制への展開を探ろうとする筆者の構想の前段を成すものである。後段については紙巾の関係で別報に譲らざるを得ないが、以上について御叱正たまわれれば幸せである。

注

- 1) 村田治郎『中国の帝都』文功社、1981、p. 40
- 2) 上掲 p. 33
- 3) 楊寛、西嶋定生監訳『中国都城の起源と発展』学生社、1987
- 4) 馬先醒『中国古代城市論集』簡牘学会(台) 民国59年、p. 18
- 5) 陳橋駅『中国六大古都』中国青年出版社、1983、p. 96
- 6) 7) 前掲1) p. 89、p. 90
- 8) 前掲5) p. 139
- 9) (梁)蕭子顯撰『南齊書』「列伝第三十八・魏虜」巻40～59
- 10) 前掲3) p. 158
- 11) 川勝義雄『魏晋南北朝』中国の歴史 巻3 付月報4、講談社、1974、p. 5

12) 前掲 9)

13) (北齊)魏収撰『魏書』「列伝第七十九・芸術・蔣少游伝」

14) 京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房, 1982, p. 121

(大学院後期課程学生)